

ウ 中学部第2学年重複学級の取組

(7) 付けたい力

- 自分ができるところをしようとする力

(イ) 題材の目標

- 主体的に給食を食べることができる。
- 食べたい物を自分で選択することができる。
- 「おいしい」「もっと食べたい」という気持ちを伝えることができる。

(ウ) 環境づくり

物理的支援環境 ① 教材教具、支援ツールの効果的な配置



気が散りやすい生徒が食べることに集中しやすいように、友達の姿が見えないような席配置に変えた。

物理的支援環境 ② 児童生徒の発達段階や障害特性に合った支援ツールの活用



体の中心線をまっすぐにして、食事がとりやすい姿勢を維持するために、お尻の下にタオルを敷いた。

坐骨が安定する高さまでタオルを折ってお尻の下に敷く。

物理的支援環境 ② 児童生徒の発達段階や障害特性に合った支援ツールの活用



今から手を洗うということが分かるように、毎日「手洗いソング」の音楽を流した。

人的支援環境 ③ 教師の役割



教師が生徒の正面に座り、「おいしいね。」と生徒に言いながら、給食を食べた。

人的支援環境 ③ 教師の役割



自分でスプーンやフォークを使用して食べることができた際には「すごいね。」と言葉掛けをした。

人的支援環境 ③ 教師の役割



今から口に入れるメニューを把握させるために、教師が一つ一つメニューを伝えた。

(エ) 生徒の変容（環境づくりに視点を当てて）

- ・ 曲を流すことで、手洗い場へ自ら移動することができるようになってきた。また、緊張することなく手を洗うことができるようになった。
- ・ タオルを敷くことで体の中心線がまっすぐになる姿勢をとることができるようになった。
- ・ メニューを言いながら生徒の目の前に並べることで、期待感をもって食事をのぞき込んだり、声を出したりする様子が見られるようになった。
- ・ 握りやすい食器具を使うことで、自分で食べることができるようになってきた。
- ・ 「おいしいね。」「これ、食べたいね。」などと気持ちの代弁をすることで、手が食器の方に伸びるなど、食事への期待感が高まってきた。
- ・ 教師が「ごちそうさまでした。」と代弁することで、教師に向かって笑顔で腕を伸ばしたり、両手を合わせたりする様子が見られるようになった。



〈握りやすいスプーンをしっかりと持って、自ら食べ物を口に運ぶ姿〉



〈一人で手洗い場へ移動〉



〈好きなものを手に取ろうと、自ら移動する姿〉

(オ) 題材全体の振り返り

取組当初は、生徒が受身であることが多かったが、取組を通して、より主体的に活動することができるようになった。利き手を調べて利き手にスプーンを持たせるようにしたことで、操作性が高まり、食べることへの意欲が高まった。また、持ち手を太くして持ちやすい食器具を使うことで、食器具を自ら口まで運ぶ回数が増えた。給食を隣の机に置くのではなく、生徒の机に置き、目の前に並べることで食事への意欲が高まった。そして、食べたいときには教師を見たり、声を出したり、手を伸ばすなどの意思表示をすることもできるようになった。そのような意思表示は、食事の場面だけでなく、日常生活の他の場面でも多く見られるようになってきている。生徒それぞれの課題に対して、解決策を考えて取り組んでいくことはもちろんであるが、給食の場面においては特に、友達と一緒に楽しく食べることができるような温かい雰囲気をつくること、そして小さなことから全て生徒の立場になって考えることが何よりも重要であると感じた。

(カ) 指導助言

助言者 広島市教育委員会特別支援教育課指導主事 金本裕史 様

重度・重複障害のある児童生徒の日常生活の指導において意識したいことは、快・不快を意思表示する力、伝えようとする力、活動の流れに見通しをもち主体的に行動する力を大切にすることである。そのための留意点としては、意欲を高めるための働き掛けを大切にしてほしい。子どもたちは発声や視線、手指の動きなどで教師に様々な意思表示をしている。そういう思いに応えられる教師でいてほしい。子どもが伝えたいことは何なのかを待ち、それを把握してから教師は動くということが大切である。また、子どもが今「できつつあること」に着目して指導目標を立て、指導内容を考えることも大切である。最終的には、子どもたちが日常生活の諸活動を自力で処理しようとする力を育ててほしい。それが生活意欲や生活態度の育成につながり、子どもたちの自立と社会参加につながる。